

# パラグアイ共和国

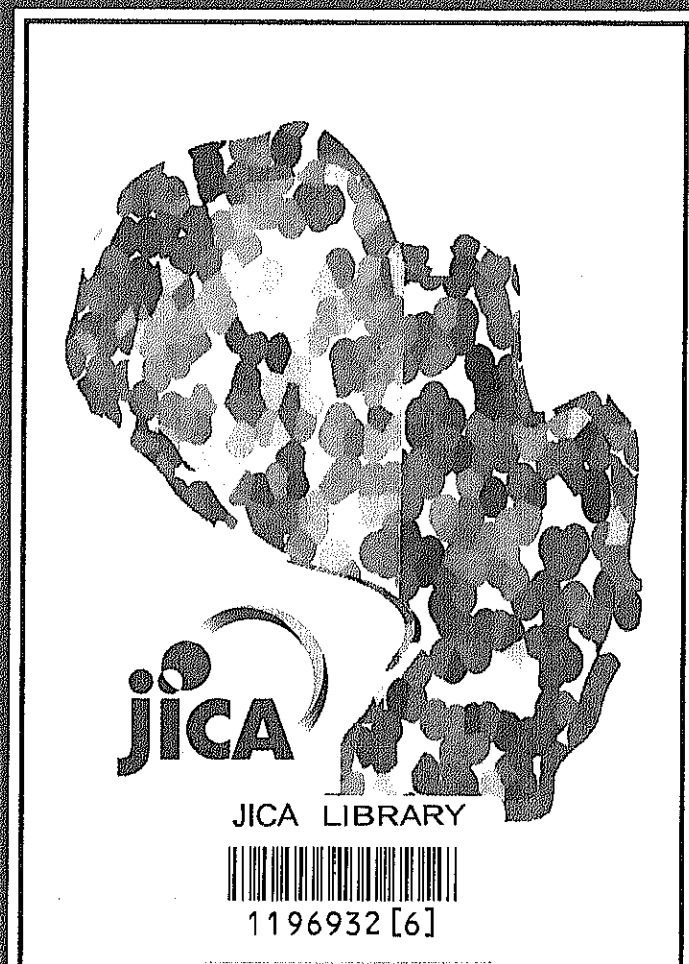
## JICAボランティア派遣30周年記念

30<sup>o</sup> Aniversario del envío de Voluntarios de la Jica al Paraguay

独立行政法人国際協力機構

パラグアイ事務所

発行：2009年9月



バグ事

J R



## はじめに

2008年9月25日、日本の無償資金協力でアスンシオン市に建設され、創立20周年を迎えたパラグアイ日本センター（人造りセンター）に、ルイス・フェデリコ・フランコ パラグアイ共和国副大統領閣下、渡部和男日本国大使他、多くの方々のご臨席を得てJICA ボランティア派遣30周年記念式典が実施されました。また、同年11月22日、日本人戦後移住起点の地であるエンカルナシオン市において、同じく多くの来訪者を得て記念行事を行うことができました。両方の式典とも、派遣されているJICA ボランティアとJICA 事務所のスタッフが力を合わせ手作りで催したもので、こういう場に事務所長として出席できたことを心から誇りに感じています。

パラグアイには、この30年間に合計約1,300名のボランティアが日本から派遣されてきました。派遣開始時は3名であったものが、この30年間に30倍以上の派遣数に増加し、パラグアイは世界で最も多くのボランティアが日本から派遣をされている国だと言えます。すべての者が熱い志を持って、パラグアイの大地でパラグアイの人々と同じ物を食べ、汗を流して働き、そしてパラグアイを心から愛し、地域発展のために取り組んできました。今も、100名以上のボランティアが貧困地域などで、カウンターパートと一緒に保健医療、教育、産業振興などのさまざまな分野で活動しています。

我々JICAは、この国の開発ニーズを踏まえながら、リードドナーのひとつとして、「地域医療の改善」、「小農自立化支援」、「行政府機能改善」を重点に援助を展開していますが、それを草の根レベルで実践しているのが、ひとりひとりのボランティアです。JICAが、30年に亘ってボランティアを派遣できたのも、JICA事業へのパラグアイ政府、国民からの高い評価と深い理解、そしてパラグアイの方々の期待に応えたJICAボランティアの功績が広く認められた結果と考えます。私は、ボランティアひとりひとりの日頃の働きに大きな誇りを感じるとともに、この場をお借りしまして、彼らの活躍に拍手を送りたいと思います。

JICAは、2008年10月1日に技術協力と資金協力を一体的に実施する新JICAに生まれ変わりました。パラグアイの新政権が掲げている貧困削減のための社会開発の促進、雇用創出のための産業振興、そして透明性のある行政府を構築するためのガバナンス強化は、日本政府のパラグアイ国への援助重点分野に合致するものであり、JICAは日本の援助政策を踏まえて、技術協力と資金協力を相互に組み合わせながら、より大きな成果を求めてパラグアイの開発のために取り組んでいきたいと思っています。

最後に、パラグアイ政府、NGO、日系社会などからのJICA事業への益々のご理解とご支援をお願いするとともに、パラグアイの開発のためにボランティアの皆さんの更なる活躍を期待して、私のJICAボランティア派遣30周年記念誌発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。

独立行政法人  
国際協力機構パラグアイ事務所長  
桜井 英充

## 目次

はじめに .....	1
<b>I . ご挨拶 JICA ボランティア派遣30周年にあたり .....</b>	<b>5</b>
1. 渡部 和男 在パラグアイ日本国特命全権大使 .....	6
2. ルイス・フェデリコ・フランコ・ゴメス パラグアイ共和国副大統領 .....	7
3. カルロス・アルベルト・サンチェス・レオン パラグアイ共和国企画庁長官 .....	8
4. 小田 俊春 パラグアイ日本人会連合会長 .....	9
<b>II . 寄稿 ボランティア派遣30周年に寄せて .....</b>	<b>11</b>
1. 望月 久 元JICAパラグアイ事務所業務第三課長 .....	12
2. 筒井 信弘 元JICAパラグアイ事務所業務第三課長 .....	14
3. 堀川 満 元JICAパラグアイ事務所青年海外協力隊調整員 .....	16
4. 菊池 明雄 元JICAパラグアイ事務所職員 .....	17
5. 緒方 明美 元JICAパラグアイ事務所健康管理員 .....	18
6. 中川 一也 元青年海外協力隊員(昭和52年度2次隊・電子機器) .....	19
7. 永代 成目出 元青年海外協力隊員(昭和55年度2次隊・農業土木) .....	20
8. 上之山 幸代 元開発青年(昭和62年度・日本語教師) .....	21
9. 小川 正子 元青年海外協力隊員(昭和62年度2次隊・助産婦) .....	22
10. 児玉 一成 元青年海外協力隊員(平成2年度2次隊・村落開発普及員) .....	23
11. 家村 明宏 元青年海外協力隊員(平成3年度1次隊・理数科教師) .....	24
12. 鍋木 武弥 元青年海外協力隊員(平成11年度3次隊・野菜栽培) .....	25
13. 橋本 千賀子 元青年海外協力隊員(平成14年度1次隊・村落開発普及員) .....	26
14. 広内 俊夫 元日系社会シニアボランティア(平成16年度・編集) .....	27
15. 高橋 依子 元日系社会青年ボランティア(平成16年度・日系日本語学校教師) .....	28
16. 女ヶ沢 充代 元日系社会青年ボランティア(平成17年度・高齢者介護) .....	29
17. 中川 明 元シニア海外ボランティア(平成17年度・農業教育) .....	30
18. 土屋 順子 元シニア海外ボランティア(平成18年度・日本文化) .....	31
パラグアイ地図 .....	32
<b>III . パラグアイにおけるJICA ボランティア派遣事業 .....</b>	<b>33</b>
1. JICA ボランティア事業の沿革 .....	34
2. 事業実施方針 .....	34
3. ボランティア派遣事業実績 .....	34-35
4. シニア海外、日系社会シニア、日系社会青年ボランティア配置図 .....	36
5. パラグアイ共和国青年海外協力隊員配置図 .....	37
6. JICA ボランティア派遣事業概要 .....	38-41



1196932 [6]

IV. <u>ボランティア派遣30周年記念式典・イベント</u> .....	43
1. ボランティア派遣30周年記念行事プログラム .....	44
2. 緒方 貞子 独立行政法人国際協力機構理事長メッセージ .....	45
3. JICA ボランティア派遣30周年記念式典(写真) .....	46-49
4. JICA ボランティア派遣30周年記念式典(概要) .....	50
5. JICA ボランティア派遣30周年記念イベント・記念コンサート(写真・概要) .....	52-55
6. JICA ボランティア派遣30周年記念及びJJ統合に関する報道 .....	56
テレビ放送 .....	56
ラジオ放送 .....	57
パラグアイ新聞記事 .....	57
V. <u>資料編 JICA 派遣ボランティア名簿</u> .....	59
1. 青年海外協力隊 .....	60-75
2. シニア海外ボランティア .....	76-79
3. 開発青年・日系社会青年ボランティア .....	80-82
4. 日系社会シニアボランティア .....	83

付属DVD ボランティア派遣30周年記念式典・イベント



I. ご挨拶

# JICA ボランティア派遣 30 周年にあたり



## JICA ボランティア派遣 30 周年にあたり

2008年9月25日に開催された、JICA ボランティア派遣30周年記念式典に参加できたことを幸甚に存じます。この度、ボランティア派遣30周年記念誌が刊行されるにあたり、一言御挨拶申し上げます。

私は、これまで、青年海外協力隊、日系社会青年・シニアボランティア及びシニア海外ボランティアの方々とお会いして意見交換をする機会に恵まれました。先日、これら JICA ボランティアの皆さんの離任に際してお話ししたことを、この場を借りて読者の皆さまにお伝えしたいと思います。

1つ目は、30年にわたる皆さんのボランティア活動についてです。個々の人が2年ないし3年間、パラグアイのどこかで実施したボランティア活動だけを取り上げてみれば、中には、必ずしも当初に期待した結果を出せなかった例があるかも知れません。しかし、日本には「涓滴巖をも穿つ」という諺があります。30年間の長きにわたり約1300名の日本からのボランティアが積み重ねてきた活動の成果は全体として大変大きな意味があります。パラグアイ社会という岩に穴が開いたのです。ボランティアの皆さま方の活動に対して心より敬意を表します。

2つ目は、日本の顔が見える援助についてです。2009年5月22日に新 JICA 事務所の特権免除等に関してラゴニャタ外務大臣と E/N 署名交換を行う式典がありました。その機会に、私は、列席の人たちに対し、次のように発言しました。

「多くのパラグアイ人は、日本による援助が自然なことだと考え、そして、それが風のように常に吹いて来るものだと誰もが信じて疑いません。しかし、現在日本は国際的な経済危機の影響を受けて財政難にあり、ODA に対する国民の目には非常に厳しいものがあります。このような状況の中で、日本がパラグアイへの援助を続けるためには、日本の顔がより目に見える形で援助する必要があります。このことをパラグアイ政府及び国民の皆様方に十分理解していただきたいのです。」

このことは新聞でも報道され、広くパラグアイ国内に伝わったと思います。皆さんのパラグアイでのボランティア活動は、まさに日本の顔が見える援助です。誇りを持っていただきたいと思います。

3つ目は、パラグアイを好きになって欲しいということです。ボランティア活動中には、言葉の壁、先方受入体制の問題その他、多々苦しいことがあったと思います。しかし、皆さんは、それらを乗り越えて、パラグアイという国、パラグアイ社会を好きになって日本に帰国していただけるものと確信しています。そして、近い将来、どのような形であってもいいですから、もう一度パラグアイに戻ってきてください。そして、パラグアイ人の友人たちと是非再会してください。

最後に、これまでパラグアイにおいて JICA ボランティア活動に関与された皆さま方の益々のご発展とご活躍をお祈り申し上げます。

在パラグアイ日本国特命全権大使  
渡部 和男



## JICA ボランティア派遣 30 周年にあたり

JICA ボランティア、ならびに関係者の皆様へ

日本国政府は、パラグアイ共和国に対し心情的に、また、効率面においても一番協力していただいている国です。本日、この 30 周年記念式典の場において、私はパラグアイ国政府の名のもとに、日本国政府と JICA、またボランティアの皆様、ボランティア派遣という日本の愛情深く、且つ効率的な協力を心から感謝いたします。加えて、本日の会場である、ここパラグアイ日本センター（人造りセンター）を含め、これまでの多くの援助に対し日本国政府に心から感謝すると共に、パラグアイ国民たるパラグアイ日系人の社会的貢献に対しても、深甚なる感謝の念を表したいと思えます。

これまで、約 1300 人の JICA ボランティアは、パラグアイ人と日々の生活を共にし、マテ茶を飲みながら、またパラグアイ料理を食べながら、多くの有益なことを国民に伝授して来ました。特に、保健医療、教育、職業訓練、農業等の分野で活躍された、これらのボランティアの協力を今後とも継続していただき、是非、その精神を伝えてもらいたく強くお願いします。

愛する我がパラグアイ国民は常に、ボランティアの皆様、門戸を開いています。また、ボランティアの方々には一層頑張って、活躍して戴きたいと願うと共に、皆様のボランティア活動の積み重ねにより、パラグアイ国の歴史が確実に変わると信じています。なぜなら、日本人の頑張り、根気、誠実さの一割でも、我々パラグアイ人が身に付けることが出来れば、我々とパラグアイ国は劇的に変化出来るであろうと認識するからです。また、この 30 周年を機会に、JICA 理事長表彰を受けられる著名なロナルド・ディエッセ氏とミゲル・アンヘル・ソラノ・ロペス氏の二人は、まさに今日の表彰に相応しい方々であり、我々パラグアイ人はそのことを知らねばなりません。

最後に、改めて JICA ボランティアの皆様が健康に気を付けられ頑張ってくださいと願うと共に、ここパラグアイが単に気候が暑いだけでなく、ホスピタリティ溢れ愛情深いパラグアイ人と共に人生のひと時を過ごすことが、皆様の今後の人生にとってかけがえのない機会となることを心から願っています。

ボランティアと関係者の皆様、一人ひとりに、心からの感謝と祝福を申し上げます。

パラグアイ共和国 副大統領  
Dr. Luis Federico Franco Gómez

## JICA ボランティア派遣 30 周年にあたり

我が国への日本人ボランティア派遣事業の 30 周年にあたり、JICA を通じて日本政府に心から感謝の意を表明させて頂きたいと思っております。

ボランティア派遣事業は、JICA がパラグアイ共和国に対し、1978 年から実施している迅速且つ継続的な事業であります。この JICA ボランティア事業を通じて、ボランティア精神と日本国民の特徴である連帯意識にあふれた、加えて、丁寧さと勤勉性にも裏づけされた日本の市民の方々が、知識と技能を移転するため世界で技術移転を行っております。中でもこのパラグアイ共和国は、様々な分野、組織及び地域でも数多くの JICA ボランティアが派遣された国でございます。

このような協力活動が我が国の発展に有意義に貢献しているのは疑う余地もございません。しかし、これらの協力活動は各国の自助努力に対する補足的なものとして考慮されるべきであり、パラグアイの受け入れ機関には、日本人ボランティアの知識と技能の移転が効果的に行われるよう、責任をもってカウンタパート機関として活動する義務と責任があります。

この他、親愛なる日本人ボランティアの方々が自国で多くのものを犠牲にして、遠く離れた国で働くという姿勢に対し、我々は非常に高い評価をしております。習慣も言語も異なる、見知らぬ人々が住むこの地で、数多くの問題を仕事上で抱えながらも、彼らはその問題を生まれ育った時から熟成されたボランティア精神で乗り越えて来ておられます。

このため、JICA との連携役を果たしながら、国際的な技術協力を所管する大統領府企画庁 STP としましては、ボランティアが行う様々な活動や行事に参加することは、非常に光栄であると共に喜びでもあります。これらに参加することは、ボランティアの努力と成果を把握するため有用な機会であり、活動の限定要因、今後の目標や残された滞在期間での課題に対する提案等、詳細について把握する良い機会になっております。

また、日本政府に対しましては、今後とも、JICA ボランティア事業が継続されますことを改めてお願い申し上げますとともに、あらゆる面で貴国とわが国の協力関係がより一層強化されますことを願っています。加えて、ボランティア事業によるパラグアイ国民への知識と技術の移転を通して、JICA ボランティアが我が国と国民に捧げる奉仕と連帯精神をパラグアイ国民そのものがわずかながらも受け継ぎ、彼らのレベルに少しでも近づくことが可能となることを期待しております。

これまでのご協力、誠にありがとうございました。

パラグアイ共和国大統領府企画庁長官  
Dr. Carlos Alberto Sánchez León

## JICA ボランティア派遣 30 周年にあたり

JICA ボランティア派遣事業 30 周年、心よりお祝い申し上げます。

ボランティア派遣事業が始まった、今から 30 年前、1978 年当時のパラグアイ日系社会は戦後の移住再開から 24 年、一番新しいイグアス移住地は開設 17 年目と開拓の真っ最中で、多くの戦後移住地ではいまだ原始林とドロ道、オートバイとランプ生活が普通で、もちろん母国日本との往来もままならぬ時期でした。しかし、また貧しくとも、共に苦勞し、共に異国で生きる同胞を、身近に感じる時期でもありました。

その後の 30 年間、我々日系社会は母国日本の高度成長の恩恵も受け、またそれぞれの努力もあり、移住地は大型機械化農業に変貌し、移住地の生活も日本の生活と大差ないところまで発展し、昔の開拓生活を思い出させるものも少なくなって来たのが現在です。

この 30 年間、JICA はパラグアイに青年ボランティア、シニアボランティア、合わせて約 1,300 名を派遣されました。その一部は日系社会の日本語学校、診療所、各種日系団体に赴任し、任期中、日系社会とその苦勞と喜びを共にされました。また中には、その業績が現在なお日系団体で活用され、また、長い歳月を経てなお、今は大人に成長した当時の子供たちの心に、その活動が生きているボランティアの方が多くいられます。

一方、パラグアイ社会に入られたボランティアの中には、パラグアイ人もしり込みするような生活環境に飛び込み、その地区の生活水準と生産活動の向上に尽くされ、また草の根レベルの両国親善に多くの貢献をされました。

ボランティア派遣事業が 30 周年を迎えた今日、彼ら JICA ボランティアがパラグアイの多くの場所で蒔いた種が、今後、見事な花を咲かせるか否かは、パラグアイに生活している我々日系と、パラグアイ国民にかかっています。願わくは、一つでも多くの活動が花咲かせ、またパラグアイ社会に深く根をおろすことを祈っています。

最後に、任期を終え日本に帰られた元 JICA ボランティアの方々が、任期中、パラグアイの豊かな自然とガラニーの人情に触れられ、その経験と思い出が、その後の、彼らの人生をより豊かなものにする事を、心から祈念申し上げ、祝辞とさせて戴きます。

パラグアイ日本人会連合会会長  
小田 俊春



II. 寄稿

## ボランティア派遣 30 周年に寄せて



## JICA ボランティア派遣 30 周年に寄せて

元 JICA パラグアイ事務所業務第三課長 望月 久

南米で最初に協力隊(JOCV)が派遣されたパラグアイに、1978年2月第一次隊員3名が赴任して以来早や30周年が経過し、アスンシオンでは「記念式典」が執り行われた由。改めて歳月の過ぎ去る早さに驚くと共に、隊員派遣の初期の時代に係わった者の一人として、この上ない喜びを感じた次第です。

往時を思い起こすと、隊員の派遣に先立ち、1977年10月中旬に「要請背景調査」のためパラグアイを訪れた時の事が鮮明に思い出されてなりません。

強い陽射しと目に飛び込んでくる色濃く鮮やかな草花、そして、初めて経験するテラロッシャ(赤土)の強烈さ。どれもが中米の醸し出す雰囲気とは大きく異なり、まさに“これが南米なんだ!”と思わされたものでした。

私が初代の駐在員としてパラグアイに滞在したのは1979年10月から1982年10月までの3年間。発令される前は、二回目の駐在だった中米のエル・サルバドルから、政情不安による日本政府の「JOCV一時引き揚げ命令」に従い約1年間の任務を終了して帰国。JOCV事務局で「隊員引き揚げの記」を取り纏めた頃でしたが、今度は最初の要請背景調査で訪問したパラグアイへということだったので、何か浅からぬ縁を感じながらの赴任となったのでした。

業務を遂行する上で一番気を遣ったのは、「隊員活動への支援と健康管理・安全対策の徹底」でしたが、滞在中、何れも大過なく推移したことは本当に何よりだったと思います。また、日系移住地に協力隊員を派遣する際の「理論構築」には、我ながら随分と知恵を巡らせたものでした。

移住地日本人会の幹部の方々からは、日系人の子弟が通う「日語校」にも体育、音楽、理数科などの隊員を派遣して欲しいとのご要望、誠に強いものがありましたので、それをきちんと受け止め是非とも実現したいとの思いからでした。

当時の「海外開発青年制度」はいずれ実施形態が変わる可能性があったので、それまでの間、JOCVスキームで

移住地の支援を行えないか?その場合、「二国間派遣取極」に拠る限り隊員の要請先はパラグアイ政府となるが、異なる日系移住地からの要望をどのようにパラグアイ政府の要請として繋げられるか? 窮余の策として思い浮かんだのが『企画庁』にその窓口をお願い出来ないか?ということでした。早速、当時のマンデンプルヘル長官(後に駐日大使)に相談したら「日系人の皆さんは、永年に亘りご苦労されながら頑張っておられ、今や立派なパラグアイ社会の一員として多大な貢献をしてくれている。お話は良く判ったのでご希望に添うように致しましょう!」と言って頂きました。“案ずるより生むが易し”。心に残る言葉を頂いた時の嬉しさは格別だったのを覚えています。

こうして1980年7月、アルトパラナ移住地へ初めて音楽(中嶋しのぶ)、体育(堀川満)の両隊員が赴任し、次いでイグアスの体育(杉田真一)、理科教師(中野公隆)、アマンバイの音楽(須永道子)、体育(見山宏)等と派遣が続いて行くことになったのです。

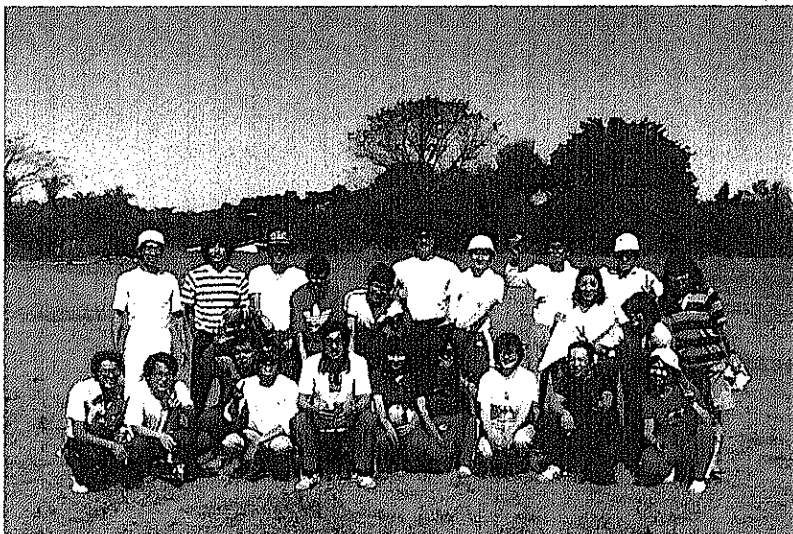
何れの移住地もアスンシオンからは優に300キロ以上離れていましたが、出来るだけ頻りに隊員の皆さんの活動振りを確かめるべく郵便物等の配達旁々巡回したものです。アマンバイでは、“牛がブラジルとの国境を陸路行き来する”のを見たり、雨が降り続くと“PJCのテラロッシャの滑走路は、ぬかって使えずホテルに足止め。2~3日してブラジル側のコンクリート製滑走路に救援機が飛来するのを待ちアスンシオンに舞い戻る”ことなど、普段は味わえない経験もしましたが、今では大変懐かしい思い出となっています。

2006年11月、ジェット口の招聘で来日したアルカラス通産省副大臣の歓迎宴を「(社)日本パラグアイ協会」が開催した折、当時東京大学教育学研究科(博士課程)で学ぶ小泉紀代子さん(旧姓 永見)というアルトパラナ移住地出身の方とお会いしました。聞いて見たら、約25年前に移住地の「日語校」で堀川先生、中嶋先生から習ったことがあり、その時のご縁もあって東大で勉強しているとのこと。あの頃の児童が・・・と思うと、感慨一入のものがありません。

また、第一次隊中川一也隊員(電子機器)の配属先だった「労働省職業訓練公団」のゴンザレス局長が、1999年に上院議長から大統領になるなど、“途上国の素晴らしさ”に接することが出来たのも嬉しい一コマでした。

更には、滞在中、在留邦人と手を携えて今後來られる方々が後顧の憂いなくお子さん同伴で赴任出来るようにと「アスンシオン日本人学校」の設立に係わり、海外子女教育財団(当時)に“アスンシオンは燃えている!”と言わしめる活動が出来たことなど、公私に亘る思い出は尽きません。

私の着任時点で10名だった隊員数は、滞在中、移住地や農牧普及局(SEAG-現DEAG)への派遣数が増えたこと等もあり、概ね30名前後を推移していましたが、帰国直前には、派遣分野を綿密に考慮した上で、50名までの受け入れ計画を後任に託したように思います。その後、有田圭輔総裁時代の1983年～85年にかけて実施された「隊員3年倍増計画(年間派遣数を400→800名台へ)」達成後には、派遣中隊員数が100名を越える時期もあったようですが、現在では、シニアのほか日系青年/シニア併せて概ね120名前後というところでしょうか。



何れにせよ、皆さんお一人お一人が配属先や周辺の方々と心を通わせ合いながら持ち味を十分発揮しつつ協力活動を展開されていることに、心から敬意を表したいと思います。

パラグアイにおけるJICAボランティア事業が、再び新しいページを刻みながら、日パ両国民の相互理解や友好・親善関係の一層の増進に寄与出来ますよう衷心よりご期待を申し上げ、寄せる言葉と致します。

(社) 日本パラグアイ協会理事、元 JICA 理事

## パラグアイの思い出

元 JICA パラグアイ事務所業務第三課長 筒井 信弘



1978年（昭和53年）2月24日青年海外協力隊派遣取り決めと同時に南米最初の派遣国、パラグアイへの協力隊員派遣から10年目の1987年（昭和62年）4月20日アスンシオン市ストロエスネル空港に家族4人で到着、多くの隊員や事務所関係者の出迎えを受け、パラグアイでの協力隊駐在員業務が始まった。

協力隊の派遣取り極めの話が進んでいた1977年（昭和52年）4月から1年間イグアス移住地に勤務、ある程度パラグアイの状況は認識し、理解もしていた。また、直前の3年間、指導相談課に勤務、協力隊については理解、把握し赴任したが、隊員と接する仕事の難しさ、隊員を2年間預かり無事に親元へ帰さなければならない責務、加えて単車貸与等による交通事故からどう守るか、隊員の任地での活動をどのように補助していくかなど苦悩が続いた。

まず、隊員の人格と自主性を尊重、信頼し、派遣が決定したときの「初心」を忘れず活動するよう充分に説明、納得してもらい、事務所が一方的に指示することなく、隊員と配属先の要望を吟味、調整のうえ全面的に補助するようになった。任地では配属先、各地の日系人の方々にもお願いし隊員活動を理解、協力してもらうようにした。そのため日本人会の催しには活動に支障のない限り参加、日系人社会の要望に応え風通しを良くするように努力した結果、隊員は信頼を得、色々な面で協力を戴けるようになった。

隊員の派遣は年々増加していた時期で、前任の駐在員

から引き継ぎを受けたときには、既に70名近くの隊員が派遣されていた。赴任最初の仕事は、前年1986年（昭和61年）5月、アスンシオン市内を車で走行中にトルメンタ（暴風雨）による街路樹ユウカリ倒木の下敷きになり、亡くなった胸形光彦調整員の一周忌の実施であったが、隊員、専門家、日系人の方々、JICA職員その他80名を越えるご参列を戴き滞りなく終わることが出来た。

その後も派遣が順調に拡大し1989年（平成元年）には100名を越え、隊員の入れ替え時期には120名にも及ぶこともあった。この背景には任期中にクーデターによる政権の交代はあったとはいえ、政情が安定していたこと、国境地帯の一部を除き治安も良く更に、日系移住者の農業発展への大きな貢献による日本との関係を反映し、地道に草の根強力をしている隊員に期待と理解が大きくなったことが隊員派遣拡大に相乗効果をもたらしたと考えられる。このように年々増加する隊員のうち、とりわけ農林・水産、保健衛生部門の隊員は、田舎での活動が原点で行動範囲が広く配属先の車両、バスの利用だけでは任期中の活動が思うように出来ないため、単車を貸与し、小さな部落や小農家を廻る本来の草の根活動をしなければならない環境にあった。

これらの隊員の安全と特に交通事故から守るために「交通安全部会」を強化、隊員相互で自発的に責任を持って行動するよう指導し、定期巡回整備、安全運転指導等々きめ細かく最大限のバックアップをするように努力しとところ事故や怪我は殆ど無くなった。在任中には、100名以上の隊員が活動していた時期もあったが、お陰で不慮の事故も起こらず無事任期を全うすることが出来たのも、隊員の個々の努力と配属先、日系人の方々、その他関係者の協力および事務所職員の人材に恵まれ、助けられ業務が出来たことに感謝する次第である。

最後に、農業分野の協力で代表されるのが、複数の職種の隊員を同じ地区に派遣、効果的なプロジェクトの発展と実現を試み、地域住民の農家所得および生活向上を図ることを目的に始められた、カアグアス県プラスガライ地区



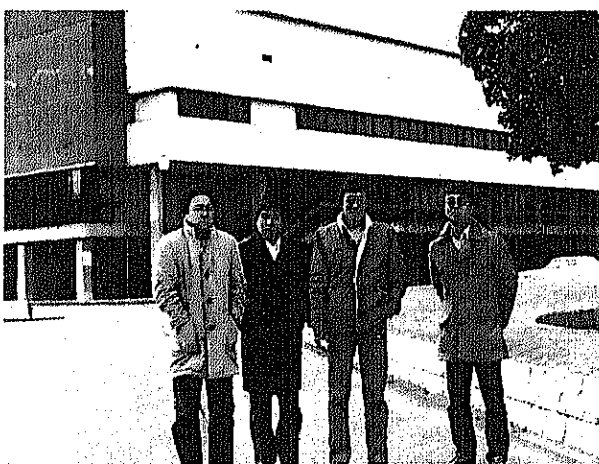
を拠点とした5地区870Km<sup>2</sup>を対象としたチーム派遣計画がある。既に計画は進んでいた中で、圃場近くの農家に下宿して活動を開始していた先遣隊員の協力を得ながら、引き込み道路500メートル近くの石畳舗装、事務所の建設、倉庫の建設、灌漑施設および試験圃場の整備を行い、間もなく圃場では野菜など作物の試験栽培、近隣の農業者を集めたデモンストレーションも行なえるようになった。

1987年(昭和62年)11月2日、農牧省において農牧大臣、農牧普及局長、地区農民代表、日本国大使館大使、JICA事務所長、協力隊事務局駒沢課長ご臨席のもとに調印式が行なわれ、プラスガライ入植地開発振興計画チーム派遣が正式にスタートすることとなった。

こうして隊員とカウンターパートが新しい事務所で活動できるようになった頃には、コロネル・オビエド市を中心とした地域に活動する隊員も増え、農業、保健衛生等の隊員の一大拠点となっていた。

昨年11月22日～23日、コロネル・オビエド地区に派遣されていた隊員有志が发起人となり「オビエド会」が熱海で行なわれ、30名にも及ぶ隊員OBと家族が集まり、私たち夫婦も招待され、20年前の青年達が往時を偲び、夜を徹して語り、懐かしい一時を過ごす事が出来た感激は生涯忘れることが出来ない思い出となった。

最後に、協力隊事業の益々の発展と隊員のご健勝をお祈りいたします。



「初期の隊員と事務所スタッフ(1983年撮影)」右より、城殿隊員(昭和54年・生態調査)、高田カストル所員、市川隊員(昭和54年・食用作物)、駒形鶴整員(昭和54年・養鶏)。城殿氏は、現在JICAの国際協力専門員、高田氏は2007年に退職、駒形調整員は在任中事故のためアスンシオンで殉職された。

## 協力隊からの自立

元 JICA パラグアイ事務所青年海外協力隊調整員 堀川 満

私がこの国に体育隊員として赴任してから 28 年が経った。そして 12 年前に永住したが、それ以後は自分が OB であることはできる限り言わないようにしてきた。いや、むしろ忘れようとしてきたと言った方が正確だ。私なりに事情があつてのことであるが。

大学卒業後すぐに協力隊を受験する自信がなく、実務経験を積んでからと、名古屋近郊の中学校に 7 年間勤務した。夢を諦められず年月が掛かったが、お陰で引き出しが多くなり、ピラポ日本人移住地の西・日語小中学校での活動は多岐に亘った。体育指導の他、父に教えられた書道教室、学生バイトで覚えた中華料理講習会、日本の少年野球チームとの親善交流試合でパラグアイチームのコーチとして子供達と合宿や大会に参加したことなどである。

井戸水とガスランプの生活環境だったが、正統派隊員の生活はこんなものだと納得し、移住地生活を楽しみ多くの友人を得た。青春時代の最終章を謳歌した、この移住地での生活体験が今の私の原点である。

帰国後は別の中学校に復職し、校内暴力の沈静化に奮闘して 4 年後に退職。協力隊調整員として再度パラグアイに赴任し、2 カ国 8 年間の調整員勤務と、本部勤務後、パラグアイに永住することになった。しかし、ここから自力で生計を立てると云うことの厳しさを、嫌と言うほど身にしみて味わうことになる。

隊員時代に本物の書道を広めたいと云う新しい夢を持ち始め、それを実現しようと、ほとんど自費ボランティアのような仕事を始めた。以前は JICA の後ろ盾があつての活動だったが、一移住者として自立して生きていくためには、それに甘えず、過去を忘れる覚悟が必要だった。しかし、手持ちの僅かな資金はあっという間に使い果たしてしまい、遠い地方へ書道を教えに行きたくても旅費の工面ができない。私の隊員や調整員時代を知る人たちの中には、昔のように積極的に活動しないものだから、がっかりする人もいる。生活費にも困るようになり、人生

最大のピンチを迎えたが、昔と変わらず励ましてくれる真の友人達の励ましを受け、およそできそうなことは何でもやって乗り越えて来た。

苦しい時期が長年続いたが、書道普及活動を日本大使館が注目してくれるようになり、日本文化月間の一行事として書道展をパンフレットに掲載していただき、大勢の参観者が訪れてくれるようになった。公的支援を受けられるようになったことは誠に有難い出来事だった。どんなに困った時でも二人の子供達への教育を我が家の最優先課題にしてきた。現在、子供達は大学で勉学に励んでくれているが、この上ない神様からの授かりものである。家内が苦境の中、明るく素直な子供達に育ててくれたことに感謝せねばならない。

永住して自立を目指すためには、過去は忘れた方が良く考えていた。しかし、自分がどう考えていようと、同じ世の中で生きていく以上どこかで JICA との関わりが出てくる。

また、28 年前に任地で先生と生徒として交流した共通の思い出を一方向的に消し去ることはできない。お世話になった周りの人達の思いを大切にすることも含めて、本当の自立した永住生活が成り立ってくるのではないか。そのことが最近漸く分かってきた。これからは、今の自分を育ててくれた協力隊の思い出を大切にしながら生きて行こうと思う。



## 30周年記念式典に出席し、思い起こしたこと

元 JICA パラグアイ事務所職員 菊池 明雄



2008年9月25日のボランティア派遣30周年式典には、愚生も招待者の一人として参列させて頂いた。30分ほど早く式場に入った。当国では、時間にはおおらかで、待たされることが多いが、受付開始から大勢の方が

会場に入り開式前には満席状態となった。30年間、途切れることなくボランティア活動を展開してきた、その関係者だけでも、その数倍を数えるであろうが、会場のスペースを考慮して招待したものと思われる。席が満席になって立っている方も多く見られ、いかに JICA ボランティア活動に関心を寄せ、大きな期待が寄せられている証であろう。出席の方々から、JICA ボランティアに対する評価の声、感謝の声が聞かれ、いかに大きな評価を得ているかを改めて再認識させられた式典であった。

私をはじめ JOCV との出会いは、当国に初代隊員が派遣されて2年目の1980年9月である。アルトパラナ移住地（現ピラボ市）の JICA 事業所勤務の時、現地公立校に昭和55年度1次隊で、体育と音楽の2名の隊員が着任した。派遣数も少ない中、県都エンカルナシオン市から赤土道路80Kmの僻地への JOCV 着任の背景には、子供の教育に熱心で、公立校カリキュラムに情操教育を取り入れるべきとの、日本人移住者の強い希望があったものと思われる。隊員両者には平日は公立校での活動、週末は野球等スポーツ指導に、毎年行われる入植記念式典のためのプラスバンドの指導等、週末、祭日返上で活動していただいたことが思い起こされる。日本から来た二人の青年の行動は、入植20年目のピラボ移住地の住民の注目の的となり、新風を吹き込み、地域の活性化に反映している。

私が直接ボランティア業務に携わったのは、定年退職する2008年3月31日までの4年半で、主に日系社会ボランティア（シニアボランティア、青年ボランティア）の担当で、空港出迎えから、任期を終えて帰国するまで

一貫通貫の対応であった。そのほかにイタプア県下のボランティア担当でもあったことから、JOCV、シニアボランティアの皆さんともお付き合いができ、それも色々な職種にわたったことから、ボランティアの方々にはロートル親爺が本当にサポートしてくれるのかと不安を抱えたであろうが、当方もかなり緊張し、勉強しながら後方支援を行ってきたことが、今では懐かしい思い出となっている。出張の際にはできるだけ多くの任地を訪問することに心掛けたが、長距離移動となり、腰等に違和感、年齢を感じながらも、ボランティアの元気はつらつとした、笑顔の活動振りを見て、自分も元気をもらった4年半であった。赴任時の住民総出で、そしてホームステイ先ファミリーの歓迎振りを見て、その都度、パラグアイが中南米第1の親日国で、交流面では中南米で最も近い存在であることが肌で感じさせられた。他方、時間的感覚、JOCV 活動の対応に地球を半周する距離感を感じたことも否めない。

JOCV 赴任の当日、サッカーの国際試合があり、それもパラグアイチームが出場する日で、前日まで確認をしたにも関わらず、俄かに休校となったり、赴任までに農民コミニティーを結成させる、圃場も整備（寒冷紗の設置等）するとの約束も、赴任して数ヶ月間、日中40度近い炎天下、灼熱の下で野菜栽培に挑戦する JOCV の活動姿を見て、調整役の難しさを感じた4年半であった。このような苦労も良い体験となって、パラグアイを好きになって帰国される皆さんの姿を見て、サポート役の我々の喜びともなった。

最後に、後続ボランティアへのメッセージです。目的達成にあせらず、あわてずに、相手あつてのボランティア活動、先方のペースに併せ、あてにして（したくなることと多々あるが）、そしてあきらめず、ここには新幹線はないのだ、鈍行で頑張れ、そしてパラグアイを好きになって帰任することを祈って、本稿をめます。

パラグアイといえば内陸に大河を持つアサード（焼肉）が美味しい国で、人々はテレレを愛し休日にはテレセツトさえあれば何時間でも過ごしてしまうという穏やかな国民性がとても印象として思い出されます。

海外ボランティア派遣の主な意味は「他国への技術支援」ですが、ボランティアの活動は「草の根活動」と称されるように現地の人々と密着した生活の中で展開される地道な活動であり、その内には「ボランティアの国際性を身につける」「自分発見」の意図も含まれているといわれます。中でも皆様の健康に係らせて頂いた立場から現在の、またこれからの方に伝えたいことは「自分発見」、言い換えれば「自己を知る」ということ、つまり「自己の根源となる心と身体を知る」ことを大切にしてほしいということなのです。

派遣された方々が現地の生活に入ると日本での便利な生活に慣れてしまっているため生活上のストレス、不満などにうまく適応できなかつたり健康上で問題を来したりする人が少なくありません。特にパラグアイでは大部分の家庭で三食、主になるのはパスタや芋類、小麦粉などの炭水化物となり、これらは油分、塩分が強くどうしても野菜不足になることは否めません。定期的に行われる健康診断ではコレステロール値の上昇を指摘される方が多くありましたが、診断後に自分の身体の変調に気づき、「なぜ？」と関心を持って意識していく姿勢が実はとても大切です。日本では考えられませんが「おやつ代わりにトマトやキュウリなどの簡単に食べられる野菜を摂るように」とか、「毎日の野菜摂取が困難な場合は週末に少し足を伸ばしてでも野菜がたっぷり食べられるレストランで食事をするように」という言葉を皆に伝えてきました。実際にコレステロール値の上昇では痛みなどの自覚症状を伴うわけではないため認識しにくい部分があるのかもしれませんが、この生活習慣病といわれる疾患は「日常の偏った食事」、「運動不足」などが原因といわれるように健康を維持する上で自己管理が必要不可欠であり、逆に症状が出た時をよい機会として捉え、自分の身体と向き合う努力をしてほしいと思います。



加えて、メンタル面において「気分が落ち込む」「意欲が湧かない」といったような場合、自然に元に戻ることもありますが、心が不健康である場合は、その症状が悪化することもありますので、早めに相談し対処することが大切です。体と同様に「心」においても「自分がどういうことにストレスを感じ苦手意識を持つのか」などといったような心の声に耳を傾け自分を知ることがうまく自分をサポートしていくことにつながります。

このボランティアに参加している2年間は少なくとも異文化や言葉の壁などによるカルチャーショックを受け、心と身体のバランスを崩しやすい時期にあると思います。そのような時期だからこそぜひ活動面だけでなく真の自分の心身と向き合うよい機会にして頂けたらその後の実り多き生涯につながるのではないのでしょうか。

最後になりましたがJICAを通じ、私は在外健康管理員というポジションが設置されてから初のパラグアイ健康管理員として勤務させて頂きました。以前に青年海外協力隊としての経験もありましたが、この在外健康管理員として皆様の健康に係らせて頂いた3年3ヶ月はやはり私の生涯の1ページとして大きな比重を持つものとなりました。

お世話になりましたパラグアイの方々のご健康とボランティア活動の益々のご発展をこれからも陰ながらお祈りさせていただきます。

## ボランティア派遣 30 周年にあたり

昭和 52 年度 2 次隊・電子機器 中川 一也

初めに、JICA ボランティア派遣 30 周年を心よりお祝い申し上げますと共に、長期にわたり本活動に尽力された皆様に敬意を表したいと思います。1978 年 2 月に南米大陸で初の青年海外協力隊員を受け入れたパラグアイへの初代隊員（昭和 52 年度 2 次隊）が派遣されて以来、脈々と活動が推進されていることを大変嬉しく思うと共に、このような大きな節目に刊行されるこの記念誌に寄稿させていただく機会をいただいた事に心より感謝いたします。そして何よりも初代隊員であった者としてこの 30 周年という記念すべき節目に、シニア海外ボランティアとして再びパラグアイで活動できる事を大変嬉しくまた光栄に思っております。

現在、長野県の駒ヶ根訓練所にて総計 187 名の一人として派遣前訓練中であり、隊員とシニア合わせて 15 名で 3 月下旬にパラグアイへ赴任予定です。30 年前の初代赴任時は他の 2 名の隊員と共に不安と期待と使命感を抱きながら羽田空港からの旅立ちでした。ここに初代隊員 3 名の名前と職種を紹介させていただきます。

長谷川清明氏	養殖	農牧省（カアクベ）
堤 美紀雄氏	花卉栽培	農牧省（サンロレンソ）
中川 一也	電子機器	司法労働省（アスンシオン）

南米への初めての派遣でたった 3 名という事で、当初は JOCV 関係者が不在の中、赴任時は JICA アスンシオン事務所長であられた中島長一郎氏はじめ現地スタッフの皆様へ暖かく迎えられ大変心強く感じた事を覚えております。我々 3 名がそれぞれ早い時期に現地に着き込み活動ができるようになったのは、現地事情に精通された JICA 事務所の皆様や、パラグアイで長きにわたり、ご活躍の日系の皆様のご支援がとても大きかったと思っております。特に日系の皆様によって培われていたパラグアイ国民の友好的かつ信頼感のある対日感情は、我々初代 JOCV 隊員にとって何よりも心強いものでした。

私はアスンシオン郊外にある司法労働省管轄下の職業能力開発局（SNPP）に電子機器技術者として赴任し、ラジオ・TV 修理コースの開設に携わりました。赴任時はコース用の舎屋もありませんでしたが、幸い信頼できるカウ

ンターパートができ、任期満了時にはほぼコースウェアを託せるようになりましたが、皮肉にも最初に開設したコースは少し畑の異なる屋内配線実践コースでした。アスンシオンから 30Km 程南にある Villeta という町に 2 カ月程住み込み、役場の協力により公共施設を利用した開催でした。地元の人たちに労働の機会を与える効果的なコースということで地元のラジオ放送局の取材を受けたのを覚えています。



（写真参照：修了式の前日生徒達が集まってきました）

2 年間の活動が終わった時もちろん充実感はありませんでしたが、自分はここで何をしたのだろう、という懐疑感をもった帰国でした。そこそこ活動はでき、カウンターパートとも信頼関係ができ、周囲の人々とも暖かい関係を築けたにも関わらず物足りなさを禁じえませんでした。その後、幸いにも日本国内で開発途上国の電気通信技術者を育成する仕事を、自分の天職として続ける事ができたのは、このパラグアイでの経験があつてこそでした。厳しい日本の仕事環境の中で様々な障害や困難にぶつかった時に、自分を支えてくれたのは技術ではなく、環境や言語の異なる中でパラグアイの人々に助けられながら活動の一つひとつ消化した経験からくる、ある「自信」であったと思います。今では、ボランティア活動とは「人の為に非ず、自分を育て支えてくれるもの」と思うようになっていきました。そんな人生観、価値観を与えてくれたパラグアイの人々に、今度は少しでも恩返しができればと思っております。平成 20 年度 4 次隊 15 名の一人としてこの 3 月下旬に赴任いたします。ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

## ああ・・・もう少しでパラグアイ・・・

昭和55年度2次隊青年海外協力隊員・農業土木 永代 成日出

JICAパラグアイ事務所より「ボランティア派遣30周年記念誌」への寄稿依頼を受けて、改めて月日の過ぎ去る速さを実感させられた。「あれからもう30年近く経つか・・・」と。私は、1980年2次隊の農業土木隊員としてパラグアイに赴任し、80年11月から83年10月までの約3年間を協力隊員として過ごした。あの3年間は強烈な印象として残っており、今でもふとした瞬間に様々な思い出が目に浮かぶ。

私は幼い時からなぜだか「海外志向」で、保育園時代は畳屋の友達の家（作業場）にスコップで穴を掘り、「地球の裏に行きたい」と言ったとのこと。真偽のほどは分からないが、とにかくそれ位「外志向」だったようである。その延長線上で、大学時代は1年間休学してアマゾンへ行き、道路開発を行っていたブラジルの軍隊組織である工兵隊に入り、測量チームの一員として原始林の中で働きもした。大学を卒業後、農業土木系のコンサルタント会社に就職し、会社派遣での海外業務を志していたが、「10年以上国内業務をしないと海外には出られない」という状況下、海外に行きたいという気持ちを抑えきれずに会社を辞め、協力隊に参加することとした。協力隊の面接では、「パラグアイ以外には行きません。それ以外の国だったら辞退します」と突っ張り、パラグアイの協力隊員となった（出来るだけブラジルに近い国に行きたかったという単純な理由でパラグアイを希望したというのが真相）。

パラグアイでの配属先はイタプア県のカルメン・デル・パラナという村の農業普及所だった。その当時、カルメン・デル・パラナはパラグアイの「米作りの首都」と呼ばれる所で、農業土木隊員ならば灌漑分野などで貢献できるという想定の下、派遣されたようである。配属先の農業普及所は、所長と小使いの二人しかいない掘っ立て小屋で、唯一の車両は時々ハンドル自体が抜けてしまう数十年もののジープ、小額のガソリン代以外に活動費はない、当然仕事は何もしていない、という状態にあった（トホホ・・・）。この現状に直面し、「パラグアイの人達が俺の活躍を期待し待っていてくれる」という日本出発時の幻想から完全に目覚め、「待っていたのはテレレだった」と思い知らされた（赴任当初の仕事は、皆でテレレを飲むことだった・・・）。

しかしそれではパラグアイまで来た意味がないと思い直し、自分で仕事を見つけて活動を行い、結局3年間も滞在することとなった。

3年後、無職の状態、さらには嫁さんまで連れて帰国した。どのように生きようかと迷ったが、3年間のパラグアイ生活で身に染み込んだ「アスタ・マニャナの精神」で協力隊の積立金をほぼ使い切るまで能天気な新婚生活を送ってしまった・・・。

その後、縁あってJICAの専門家や専門員として開発協力を携わってきている。今振り返ると、開発協力を従事してきた原点は、「パラグアイへの恩返し」をしたいことにあつたように思える。南米の小国パラグアイ、牛の数が人口より多いパラグアイ、他の国から馬鹿にされるパラグアイ、自由貿易の強風で今にも倒れそうなパラグアイ、牧歌的なパラグアイ、人間らしさ丸出しのパラグアイ人、おもしろくない冗談を飛ばすパラグアイ人・・・そのようなパラグアイが本当に愛おしい・・・。

そのようなパラグアイに「恩返し」をしたいと願ってきたが、希望とは裏腹に私の長期赴任先はメキシコ、インドネシア、タイ、アフリカのガーナというように、パラグアイから離れる一方だった。しかしある時に気付いた。見方を変えれば、地球を西回りに段々とパラグアイに近づいていると。そして今度こそはと期待してみたものの、現在はお隣のボリビア止まりとなっている。（ボリビアへは年3回ほど出張している）・・・。

「ああ・・・もう少しでパラグアイ・・・」、愛おしいパラグアイに幸あれ！！

（筆者は現在 JICA 国際協力専門員）

## 革命のエネルギー ～パラグアイと日本の統合～

昭和62年度開発青年・日本語教師 上之山 幸代

出発は1988年2月14日。日本は、まさにバブル景気にさしかかろうとしていた。華やかな日本から最も遠い国パラグアイ。20歳代後半の3年間、日本語教師という役割をいただき、イグアス移住地の皆さんとの真剣な関わりに精一杯のエネルギーを注いでいたあの日々。21年が過ぎている。なのに、この文章を書き始めたとき、とても近い過去のように思えてきた。私の体の中には、あの頃と同等の熱い思いが、確かにあるのだ。

今、2009年。100年に一度の世界的経済危機と叫ばれる中、「革命」という言葉に、ドキドキ。きっと、パラグアイでボランティアをした仲間たちも同じように、魂に火が付き始めるのを感じているだろう。ボランティア派遣が始まって、ちょうど30年。ここで、今一度、当時を振り返ることが、これからの時代を切りひらくパワーになる。

日系人の数が全体の6分の1くらいを占めていたイグアス移住地、当時6年生だった日系二世の恵美ちゃんは、こんな質問をした。「幸代先生！スペイン語で考えるのと、日本語で考えるのとでは、どうして答えが違うんですか？」

バイリンガルである二世の持つ宿命。恵美ちゃんの場合、悩み事をスペイン語で考えると明るく解決に向かい、日本語で考えると、複雑になり混沌としていくというものだった。言葉は文化、2つの文化を知ってる脳が、2つの思考のハザマで揺らぐ。そして、二世の人たちはそれらを統合する術を身に付けて、より強く魅力的な人間になっていくのだ。

さて、いくつもの数え切れないくらいの思い出の中から、恵美ちゃんのことを書いた理由は、これからの革命においては、「統合」が一つのテーマだと思うから。

～相反するモノを、いかに統合していくか？～

これは、パラグアイでの3年間を終えたばかりの29歳の私に投げかけられたテーマでもあった。私たちの後に続くボランティア志望者への説明会のお手伝いをしていた

時、JICA職員の方から、「これからは、共存ではなく、共生でもなく、統合なんです」と、強く教えていただいた言葉が、そのままの輝きで蘇る。

これからの「革命」にも、もちろん、リーダーは必要だ。しかし、一人のカリスマ的な革命者はいらない。まずは、一人一人が個性的に輝き、個々につながり、統合。A+B=Cという人間関係のケミストリー（化学反応）を起こすのだ。次にインターネット的にそれぞれが中心となり、波紋を広げていく。共鳴しあう波同志は、うねりも高くなる。新しいタイプの「革命」では、みんながリーダーとなり、新時代を創造していくのだ。

地球規模的には、正反対に位置する「パラグアイと日本の統合」には、大きな意味がある。それぞれの国の個性を生かした関わりから、幸せを生み出す革命。これが出来るのは、「持続的な意志力」と「愛に基づく行動力」ある私たちなのだ。誇りを持って、リーダーの一人になろう。

当時から、ステージを通して伝えること、共感することにもエネルギーを注いでいた。現在、アルパ演奏を交えた「講演」活動が仕事となっている。2006年出版の著書「セルフ・セラピーな心」の第一章「パラグアイの大地・人・星たち」では、当時のエピソードに、独自の意味づけをして、伝えている。



## 国際看護協力の原点—思い出のパラグアイ

昭和62年度2次隊青年海外協力隊員・看護師 小川 正子 (旧姓 大嶋)

パラグアイ共和国 JICA ボランティア派遣 30 周年おめでとうございます。

私は、1988 年～1990 年、国立大学アンドレバルベロ校で看護教員として、2 年間のボランティア活動でカウンターパートとともに看護学生に対し、外科看護の理論と実習指導を行いました。改めて当時のことを思い出しますと、二つほど強烈な思い出として今なお鮮明に残っていることがあります。とある国立病院の手術室に“窓”がありました。それだけでも奇異なことなのですが、その窓にはガラスもなく厚紙 1 枚で外気と通じていました。手術が始まったまさにその時、有ろう事か、大きなコブ牛が音もなくヌーと顔を窓から手術室に入れてきました。「ギャー!! な、な、何ぞとなの・・・」私が言葉を失っていると、カウンターパートがこどもなげに一言、「あー、いつものことなのよ。手術室には入ってこないから大丈夫よ」私、「う～ん」。

また、他の国立病院で看護学生の実習指導をしている時、ある患者さんが急変しました。学生に「すぐ、担当医を呼んできて、今すぐ」と叫ぶと、学生は腰を振ってゆっくり歩いて医者呼びに行き、医者、看護師、看護学生 3 人がゆっくり歩きながら戻ってきました。私が人工呼吸をしていると、医者が一言、「あー、君、そのまま続けていて・・・」と言い、病室を出ていきました。私「う～ん」。

このような状況でも学ぶことも多く、必要最低限の看護器材がなくても看護はできる。“看護とは”を考えるとこの原点に立ち返らせてくれました。

生活面でも学ぶことの多い生活をさせてもらいました。日本において、老人の孤独死が問題になっていたちょうどその頃、私が下宿していた隣の一人暮らしの老人は、歩くことが不自由でいつも家の中で生活していましたが、常に道路に面した窓を開けており、家の前を通る人と会話をしていました。また、近くに住む若い女性らが、その窓に向かって「今から市場に行くけど、何か買ってくるものあるー？」と声をかけていました。孤独死とは無縁の生活をしておりました。また、ホテルやレストランでは、当たり前のよ

うに老人らがサービス業の多くの部分を担っていました。彼らは生き活きと働き、私たちに癒しを与えてくれるような心のこもったサービスを提供してくれていました。

現在、私は JICA 派遣専門家として 11 年目を迎えております。これまで専門家として自己満足して活動できているのは、パラグアイでのボランティア経験が原点になっています。スペイン語をほとんど話せないボランティア看護教員が自分のもっている看護師・看護教師としての知識・経験・態度をどのようにカウンターパートらへ伝え、彼女らと一緒により良い仕事をする事が出来るのかを日々考えていました。まず、人間関係づくりから始め、講義内容や教育技法の改善に取り組み、目に見える改善を少しずつ計画的に展開しました。ひとつ改善するごとにカウンターパートと一緒に喜び、学科長に報告したり、教授会で発表したりした結果、カウンターパートへのプロフェッショナルとしての動機づけができ、ボランティア活動終了前には、カウンターパート自ら教材作成に積極的に取り組み、効果的な授業を常に検討するようになっていました。

それから 13 年後、JICA 専門家としてパラグアイに赴任した際、昔の仲間が、「今でも Masako が教えてくれたことを実践しているよ」、「心配しなくても教えてもらったことを誰も忘れていないし、今もあの時一緒に作った実習評価を使っているよ」、また、その当時の学生は、立派な看護部長または看護師長さんになっており、「Prof! また教えに戻ってきたの・・・」と、相変わらずの優しさで迎えてくれました。

パラグアイの経験から、国際協力の基本は“人間関係づくり”にあり、ということを知り、派遣専門家になってからもそのことを肝に銘じ、まずは相手の言葉を十分に聞き、取り敢えず受け入れる。それからこちらの意見を具体的に提示する、という方法をとっています。

これからのボランティア活動が益々有意義なものとなり、世界の開発に大いに役立つものになりますことを期待しております。



## チャコの夕日

平成2年度2次隊青年海外協力隊員・村落開発普及員 児玉 一成

パラグアイ JICA ボランティア派遣 30 周年、誠におめでとうございます。青年海外協力隊並びにシニア海外ボランティア事業が日本における世界の最前線での国際協力活動のひとつとして日本の国際協力を支え続けていること、そして同時に人間を、世界を、日本を現実から見詰め、草の根の底辺から学ぶことのできる真に有意義な、貴重な場であること。元青年海外協力隊員として、本場に誇りを持つことができるとともに、心よりお祝い申し上げます。

15 年前のあの日々が逆光の彼方に鮮明に浮かび上がってくる。あの活動が自分にとってはなにものにも変え難い、きらきら光る、珠玉の原石であると思っている。今でも思い出す、村落開発普及員としての任期を終え、村から首都に向かうバスの中で、まるで、チャコでの3年の生活が、いや活動をともにした先輩隊員達の情念が、村人の情念が、混淆した固まりとして凝縮し、壮大な真っ赤な夕日となって、何かを語りかけてくれるかわりに、動きをやめ、静止し、こんこんと燃えてくれていた姿が目に見えなくなる。無駄になるかもしれない井戸を村人達とともに泥まみれ、汗まみれになりながら何本も掘ったこと。村に飲料水用のため池の水さえもなくなり、何十キロも離れた小さな水源から村長とともにトラクターで毎日水運びを行い、村人に水を供給したときの子供たちの笑顔。グアラニー族インディヘナとして誇りを失いたくないといったリーダーの眼差し。任期終了時に村人の皆が、民族舞踊を踊ってくれ、涙を流し、ヌエストロエルマノ（我々の兄弟）と言ってくれたこと。国際協力の概念、哲学や手法等が開発され、進歩している現在でも、最後に人を動かすものは、一粒の涙であること。ともに底辺から流す汗であり、後ろ姿を見せることであると信じて疑わない。

一粒の涙が人を動かすことは、人間の情念のみが闇を照らす激しき雪であり、底辺から、同じ涙を噛み締めること、民族の悲しみを赤誠と骨髄から感じる事が、草の根活動の原点であると思っている。2年前の自衛隊活動がイラクサマワの住民から受け入れられた中で、自衛隊員の人々が、基地のまわりに哨戒線の鉄線をはりめぐら

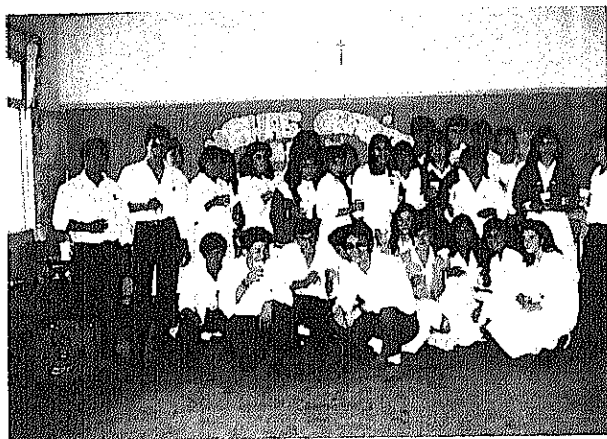
せるとき、日本の自衛隊員達は現地の人々だけにまかせるのではなく、自分たちも一緒になって傷を作りながら、汗を流しながら、この大変な作業を行い、住民達全員の士気が上がったと灰聞している。ここにも現地住民と底辺をともにした自衛隊員の姿が見受けられる。

また日本の協力隊をふくめた援助活動は NGO との住み分けがあり、それぞれに特徴があるが、要請主義を基本としており（もちろん要請を取り付けるために水面下で日本側からの打診があるとしても）、これは現地側を敬い、押し付けではなく、自分たちの足で立とうとする、現地の意思を尊重しようとするあらわれであると考えている。特に青年海外協力隊事業は技術移転の側面もあるが、協力隊の命とは最前線において、その地に住む民族の悲哀を含めた様々な要素を底辺から感じ知ること。世界の中から人間の実相と我が祖国日本を見つめること。そして日本というものを日本人の活動を通じ知ってもらうこと。即ち、協力隊スピリッツとはそれぞれの花の特性を認めながら共榮していく、草の根の国際協力活動を通じた日本精神、ジャパンスピリッツの顕現であると信じて疑わない。

また、絶対に忘れることができないのは現地だけではなく、あの隊員連絡所で、素晴らしい仲間がいてくれたこと。バカになって朝まで飲み続けたり、時には士気を消失し、隊員活動に自信を失い、互いに励ましあったり、隊員活動について激論になったり、すばらしき隊員の仲間や、JICA のスタッフの皆さん、調整員の皆さん、現地スタッフの皆さん、一人ひとりの顔が浮かび、全てこれらの人々のおかげで過ごせた3年間であったと思っている。ふと目をやるとそこには、今もひっそりとチャコの砂と活動時いつも身につけていたウィリアムローソンの野球帽と村人がくれたヌエストロエルマノと刺繍された民芸品が眠っている。いや、いつも彼らが自分の行動を見つめている。常に人間として、士としての生き様に恥じていないか、闇をつんざく牙を失っていないかどうかと、問いかけてくる。饒舌ではなく、静かな、そして熱い眼差しを向けて。

## ボランティア派遣 30 周年にあたり

平成3年度1次隊青年海外協力隊員・理科教師 家村 明宏



もう帰国して15年以上経つというのにパラグアイに赴いた時のことを鮮やかに覚えている。9月初旬にしてかなり暖かな気候、ちょうど日本の5月下旬の頃のような。照りつける太陽とどこまでも続く丘陵地帯に、放牧された牛、ウシ、うし。思わず「バカばかり！」などとくだらないことを言ってしまった事も思い出す。任地は、Alto ParanaのJuan Leon Mallorquin。アスンシオンとブラジルを結ぶRuta2に沿った村落。特に何の特徴もない、パラグアイにはありふれた風景だった。赴任した学校Colegio Espiritu Santoは、この村に似合わず立派な建物だった。校長をはじめ先生方はまじめで温厚な感じの良い人々で安心した。「理科教師」としての派遣だったが、何かこれをと、特段求められていることがあるわけでもなかった。全体的なレベルアップ、それと実験・実習の指導。当時のパラグアイの教育課程では中等教育後半3年Bachilleratoでは、物理・化学・自然科学の3科目構成で、ここでの自然科学は生物学・地学・環境科学の合わさったもの。これから2年どう活動をしていくのか、とにかく先ずは使われている教科書を全て見せてもらってから考えることにした。

実はパラグアイに来る前から、本職は高校の生物学の教師だが、生物学は避けて物理学か化学の指導に絞り込むことを考えていた。理由は簡単、個々の生きものやからだの各部の名称である。スペイン語の辞書にはある程度有名なものしか記載されていない。それを覚えるだけでも大変だがそれだけでは済まない。日本でも分野・場面によって和名、英名、通称名が入り交じって使われており、さ

らにはその地域独自の呼び方もある。当然、ここでも名前の混乱を予想した・・・この考えは正しかった。現地の先生の行う野外観察授業に同行した時のこと、草花や樹木などの名前をグアラニー語名で教えているではないか。このとき、決心は固まった：物理と化学の先生で行こう、と。言葉が出来ないので初めのうちは、授業を見て先生へのアドバイスをすることだけを仕事にしていたが、まずまずと思っていた授業の内容がだんだん様子が分かるにつれ、これはちょっと、という思いになっていった。要は教えている先生の方が表面的な理解しかできていないことに気づいたのだ。途中からは授業を直接、担当することも行ってみた。ところが当初は生徒の数的理解力や計算力のなさが掴めていないことから、こちらの展開が速すぎて“授業がわからない！”の大合唱となってしまったのだ。それまで経験したことのない、生徒の拒絶反応だった。

結局の所、2年間の活動を振り返ってみて、大したことは出来なかったなと言うのが正直なところ。県の現職教員に対する講習会を計画・実施したのが最も大きなイベントだった。生産活動と違って、結果がすぐには出ないのが教育の困ったところでもある。逆にこちらが学ばせてもらったことは山ほどある。その中でも最も大きな事は、人にとって大切な「豊かさ」とは何なのか、ということだ。パラグアイでの2年間、自分にとってとても豊かな生活を送れたと、当時も今でも思っている。今の日本は他の国と比較しても便利であるし快適でもある、また安心安全かもしれない。だが豊かであるかと問われれば、溢れかえらんばかりの商品・サービスの点ではと、断り書きが必要となる。

そしてもう一つ、日本にいる人々が見落としがちな日系移住者の方々の歴史と評価だろう。多くのパラグアイ人から日本人は素晴らしいと言われたが、それは私や家電製品ではなく、この地に根ざして農業に励み、尊敬を勝ち取ってきた移住者への評価である。それが決してお世辞や誇張ではない評価であることは、賞賛しているその目が物語っていた。私自身、イグアス移住地の皆さんやJICA職員の方々には滞在中、本当にお世話になり、感謝に堪えない。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 活動を振り返る

平成11年度3次隊青年海外協力隊員・野菜 鈴木 武弥

パラグアイの広く青い空の下、常に青い自転車に乗っていた。雨で道が川になっても、そこを自転車で渡った。それは楽しいことでもあった。月に2、3度はパンクするし、私の尻を傷つけたこともあるが私にとって、こんな快適な乗り物はなかった。

現地、ピラールに着任してすぐに、任地の農学校まで徒歩で通うには、あまりに遠いと判断してから、事務所に自転車を申請させていただいた。ただ、届いた自転車に驚いた。かっていいのだ。ピカピカした新品であり、足の短い私には乗りにくいタイプでもあった。何日か乗るものの「これはだめだ。自立ちすぎる。」そう感じて返却させていただいた。農学校の生徒たちも、その自転車を見る目が違った。「高く売れるだろうな。」そんな目をしている生徒もいたくらいだから。この町では誰も見たことがないタイプだった。それを一言で言うならば「違和感があった」のだ。

その後すぐさま町の自転車屋へ行き中古のブラジル製を購入した。確かに何年も乗り古された感はあるが、フォームがいい。店の主人は自慢げに「昔、ここは自転車の街で、かつての往来は自転車だらけだった。その頃の自転車の雰囲気があるんだ。」中国製がほとんどを占めるお店の中で、なぜか私にそれをすすめた。その時の私の感覚にぴたりとフィットした。それから任期最後までこの自転車とは、付き合うことになった。

活動も終盤になってきたある日。不覚にも自分の眼鏡を壊してしまった。修理に慣れているこの国では、もう一つ買う選択肢など思いつくわけもない。私は、街の眼鏡屋さんを訪れた。50歳ほどのおじさんがひとりで店番をしている。そっけないような、けれど遠ざけるでもない、いわゆる普通の景色だ。

「どうしたんだい?」「いや、眼鏡を踏んずけて壊したんです。」「これはひどいね。」と言われるとおり大きくひしゃげている。それでも、どうやら、修理は可能らしい。そんな、なんともない会話が続く中、私は急に涙があふれ出してきた。さまざまな思い出が、走馬灯のように頭の中でまわりだしたのだ。日常の中に、そういう要素を引き起

こす何かがあったのかもしれない。眼鏡の思い出ではない。その様子に店の主人が驚いて、「おお、大丈夫か。」心配そうに声をかける。「どうした?」と聞かないのは、彼なりのやさしさに思えた。

ついには「お前からは金がとれん。」しょうがないな、という、よく彼らがする表情を見せてくれる。自分としては、値切るために泣いたのではないが、折角だからまけてもらおう。最後には笑っているのだから、泣いているのだから、わからなくなって私の顔はくしゃくしゃになっていた。その日常の景色には、一切の違和感がなかった。

帰国後、今でも中南米で活躍する協力隊員同期がいる。NGOで活躍する同期がいる。JICA関連でがんばる人間もいる。「南米が呼んでいた。」と感じて派遣されてから様々の得がたき経験ができた。その自分自身とは今も連続性を持って生きている。けれども私の場合はパラグアイでの体験を今の生活の中で体現すればするほど、目に見えないものに遠ざけられる。パラグアイの話をしれば疎ましがられ、交流をしようとすれば無視される。きっと「違和感」が存在するのだ。

任期後は、得てして自分の立つ位置を見失いがちである。私もその一人であるのだ。個々人の個性に伴い、それぞれ立つ位置がある。私は、私の目の前にある道を臆することなく堂々と歩くしかないのだろう。

今回は敢えて活動の内容ではなく、現地での日常を載せた。それは当時、私の活動を懸命にされた人々への私の誠意でもある。当時は気付かなかったが、協力隊調整員の苦労しかり、陰ながら活動を支援していただいたJICA事務所職員の方々、大使館の方々のそれが、今では見えてきたからだ。あらためて思うならば当時の山口所長には大変失礼なことを書いた記憶もある。今は、歴史と社会にどれだけの労苦が存在していたかが、ようやく見て取れるようになってきた。自分の立ち位置とはそういうものだと思改めてこの文章を書きながら感じている。本当に感謝である。

## ボランティア派遣 30 周年にあたり

平成14年度1次隊青年海外協力隊隊員・村落開発普及員 橋本 千賀子

パラグアイ JICA ボランティア派遣 30 周年、誠におめでとうございます。ここまでのべ 1300 名の隊員がパラグアイの大地でテレレとともに過ごすことができたのも愛情深く親日家であるパラグアイの人たちあってのことだと本当に嬉しく思います。

思い返せば 2002 年 7 月広尾での訓練を終え、7 月 14 日、それぞれ想いを胸に日本を出発した同期 20 名の仲間たち。どんな 2 年間になるのか、でも不思議と不安より期待のほうが大きかったのをはっきりと覚えています。そして 1 日以上経てようやくたどり着いたパラグアイ共和国。そこで見たあのきれいな空は今でも忘れることができません。“地球の裏側”とも言われるその地にも、変わらぬ青空が広がり、人々が変わらぬ生活をしていたのです。

それからの日々、現場はまさに目の前に。机上の理論だけでは通用しないリアルな現実があったのです。いかに今までの自分がステレオタイプだったのかを痛感させられました。何もできない自分・・・何をしに来たのだろう・・・

そんな活動を支えてくれたのがやはり同期を中心とした協力隊の仲間たち。パラグアイの習慣にならい同期の誕生日にはアスンシオンでお祝い会を行いつつ情報共有。悩み事や逃げたくなる時には同期のところでリフレッシュしたり新たな活動のヒントをもらったり。

そして大好きなパラグアイの人たちと時にはカイグェ、テレレをしながら話し、チパを一緒に作り、週末のアサード、夜な夜な繰り広げられるフィエスタ、カッチャカ・・・

日系人の方々にも本当に良くしてもらい、あのパラグアイで食べた日本料理、桜の花、盆踊り、運動会、広大な大豆畑で働く姿、何より人々の優しさは、今でも鮮明な記憶として残っています。

そうして時には泣き、笑って、悩んで、語り合っ、パラグアイという国の習慣や人々の姿を知っていくことになったのです。



パラグアイでの 2 年間。そこでは本当にたくさんの愛をもらいました。そしてその褒める文化には学ぶべきものがありました。出会って支えてくれたすべての人たちに今は感謝の気持ちでいっぱいです。

あの 2 年間で得たことを、地域に還元する。そんな気持ちで、今は生まれ育った福島で国際協力を推進する仕事をしています。日本も捨てたもんじゃあないなあ。なんて思いつつ。

パラグアイでの協力隊活動は誇れたものではないけれど、パラグアイの人たちと一緒にご飯を食べて、一緒に眠り、共に歩いた日々をこれからも大切にしつつ、彼らと交わした約束“将来、私にも家族が出来たときにまた来るからね”が果たせる日を楽しみにしています。

¡Viva Paraguay!...

## パラグアイでの「記念誌編纂」活動の思い出

平成16年度日系社会シニアボランティア・編集 広内 俊夫

パラグアイ JICA ボランティア派遣 30 周年、おめでとうございます。私は、2004 年 7 月から 2006 年 10 月まで日系社会シニアボランティアとして、その後 2007 年 8 月まで個人ボランティアとして「パラグアイ日本人移住 70 年誌」の編纂に携わりました。妻と子ども 3 年間をパラグアイでボランティア活動に寄与できたことをとても光栄に思っております。サンパウロからアスンシオンへの赴任途上、眼下に見たパラグアイの赤茶けた大地、緑の木々の合間から見える家々、そして青い空がとても印象的で、今でもパラグアイを忘れることはできません。

さて、私は元々、コンピュータ技術者でしたが、定年後を模索していたところ、JICA の記念誌編纂が目にとまり、これに応募したことがきっかけです。会社で社史編纂等の経験は多少ありましたが、編纂自体はズブの素人。本当に出来るのだろうかと一抹の不安がふと過ぎたのも事実です。ただ、素人でしたから、「みんなの力を結集して作ろう」というのが私の指導の命題でした。会社でプロジェクト運営の経験がありマネジメントには多少自信がありましたので、この仕組みとボランティア活動を結合し、記念誌編纂の指導方針としました。

編纂業務には多くの協力者が馳せ参じてくれました。仲間や協力者とのように記念誌を作ったか、その活動の一端を紹介しましょう。これは JICA ボランティア活動一般にも役に立つと思います。人が集まれば組織ができ、そこには文化が生まれます。いろいろな目的を持つ多くの人々の集まる組織では、どのように仕事を進めるかが大きな課題です。編纂事務局ではまず、次の「ボランティア精神 4 か条」をみんなで決め、合言葉としてそれを壁に貼りました。

### 「私たちのボランティア精神 4 か条」

- ①何をするかをはっきりさせ、全体を引っ張ること
- ②多少不安があっても、とにかく一步前へ出ること
- ③まわりの仲間を信頼し、参加者を増やしていくこと
- ④そのうちみんながついてくると希望を持って進むこと

困難に直面した時などには、これを指差し「あの精神でいこう」などと声を掛け合い、仕事をしました。この「4 か条」は仲間には勇気と希望を与えたようです。しかし、組織は個々人の勇気や希望だけでは機能しません。組織においては、人間関係を良くし仕事をしやすい環境を自分たちなりに作り上げることが必要です。

そこで、次に編纂事務局では、みんなで成果が確認できるよう、出来上がった草稿を壁に貼り、また、一通りできたところで冊子にまとめ、目に見える形にしました。いわゆる成果の共有化・可視化です。こうすることによってチームワークも格段によくなり、仕事も進みました。これらの活動は自然と編纂事務局に来る外部の人々の目にも留まり、日系社会の多くの人たちに関心を持って賞えるようになり、協力者も増えました。編纂事務局に写真、記事、意見等が届けられ、記念誌を期待する人たちが多くなり、編纂仲間の大きな励みになりました。なんでもそうですが、新たなことは軌道に乗せるまでが大変ですね。このような組織文化の確立はボランティア活動の要だと思います。

正直なところ、最初はどんな記念誌ができるのかわかりませんでした。日系社会の多くの方々の参加の下、2007 年 6 月 18 日、記念誌は無事完成。6 月 30 日にお披露目のため、人造りセンターで「記念誌刊行祝賀会」が開催されました。日系社会や JICA をはじめ多くの関係者の方々に喜んで頂けたことで、一応私の責任は果たせたかなと思っております。ボランティア活動は、自分自身の知恵と能力を生かし情熱をもって人を育てることであり、それはまた、ある意味では自己実現としての活動だと思います。

一緒に仕事をした懐かしい編纂仲間やお世話になった方々を思い浮かべながら、記念誌編纂の思い出を述べさせて頂きました。この思い出がボランティアを目指す若い人たちの参考になれば幸いです。日系社会および JICA パラグアイ事務所の発展を祈念しております。

## 地球半周分離れた国での大切な出会い

平成 16 年度日系社会青年ボランティア・日系日本語学校教師 高橋 依子



素敵な出逢いの毎日だった。『人』との出逢い。家族親戚で近所さんとテレレをしつつ何気ない時を過ごし、日々の生活を大切にすパラグアイの人々と出逢い、家族の一員として過ごす中で、自身の家族の在り方を反省。当たり前でシンプルなものを大切にしたいと思った。『言葉』「スペイン語・グアラニー語」との出逢い。『言葉』は人と人との懸橋で大切なコミュニケーションツールと実感。更に教えることで「日本語」とも再会。今まで以上に『言葉・日本語』の面白さ奥深さを感じた。そして『日本』との出逢い、再会。パラグアイ食はおいしかった。帰国後も肉厚の牛肉やチーズたっぷりのチパ・ベジューが恋しい。しかし、日系人宅で頂いたご飯と味噌汁には安堵感を覚えた。また、日系人の皆さんが青年部、婦人部等各々の役割で活動する姿を見て、改めて日本の地域社会連携、自身の役割を考えた。以前は日本人というより「地球人」と思っていたが、今は日本人であることを否定せず、むしろ主張し誇りに思い地球人の中の「日本人」でいたい。

「移住 70 周年は大きな意味がある。」赴任直後ある方の言葉で、私の活動方針が決定。過去と未来…その大きな中継点・節目の時、日本人としてこれらを大切にしたい。ラ・コルメナとパラグアイの未来を担う子ども達に、パラグアイと共生しながら脈々と日本文化を引継いできた先人達の軌跡を見つめ、未来へ繋いで欲しい。そう思い、劇「ラ・コルメナ 70 年のあゆみ」や「よさこい」に、日本語学校の先生方・生徒・地元青年と共に取り組んだ。特によさこいは、パラグアイ人と日本人が共生しているラ・コルメナらしく見事なパ日コラボだった。青年と共にレッスン画像（我が妹作）で特訓し、何とか覚え日本語学校生徒に指導。先生方考案の絵を背後に印刷したはっぴ作成は、パラグアイ人であった。必需品「なるこ」もパラグアイ人大工が日

本の物を見様見真似で作成。パ日全生徒で練習し、地元ラ・コルメナでの祭、運動会、秋篠宮様来訪の際も披露させて頂いた。

中でも「パラグアイ国日本人移住 70 周年記念祭典」が印象深い。その祭典のアトラクションに当初我が町ラ・コルメナは不出場の予定だったが、歴史の 1 ページを作ったラ・コルメナとして文化協会会長さんたちが再度当局へ掛け合い出場枠を確保。(感謝!) 青年、子どもたちによる「よさこい乱舞」を披露することに。普段ラ・コルメナから殆ど出ない子どもたち、大勢のしかも VIP の前で踊ることに緊張。しかし、若手リーダーたちが皆を率いている姿に安心。私も「トランキーロ!」と笑って励まし、子ども達に負けず楽しく踊り狂った。終了後「楽しかった! 皆拍手してくれた!」等、「狂喜・乱舞」。「やればできる、自信を持って! ラ・コルメナの若者達!」と心で叫びつつ皆で乾杯したコカ・コーラの味は格別だった。

当初これらの計画は「あの子達にできるか?」「劇作成なんて難しい」「皆の前で踊るのは恥ずかしい」等々、不安や迷い、反対意見もあった。しかし、劇の台詞を覚え、よさこいを生き生き踊った子ども達、一世の方々の話や移住史を元に臨場感ある台詞付の劇台本作成、よさこいの小道具・資金・活躍の場作りに邁進した大人達。日系人パラグアイ人不問の力により、子ども・青年達は過去を見つめ、未来へ向け新たな歴史を意識したと信じている。今後も日系社会のみならずパラグアイ社会を支えてきた軌跡に誇りを持ち、ラ・コルメナらしくラ・コルメナの未来を皆さんで築いて行くことを、意義ある歴史の中継点に微力ながら関わった者として切に願う。70 周年に出会った子ども・青年達率いる約 30 年後の 100 周年で彼らに再会することを老後の楽しみにしながら…。

地球半周分も離れた国での数々の出逢いにより、足下を大切に生きる大切さ・楽しさを実感した。全ての出逢いに感謝し、これまでをこれからに繋ぐべく、私は今、温かく見送り見守ってくれた家族と共に、フルサト東北の地を踏みしめている。

## 2年間の福祉活動を通して

平成17年度日系社会青年ボランティア・高齢者介護 女ヶ沢 充代



2年間の活動を通し、介護するだけが高齢者福祉ではない、高齢者を楽しんでもらい笑ってもらうことも福祉だということを教えてもらいました。派遣前までの私は、身体の不自由なお年寄り、寝たきりの方の介護をすることが高齢者福祉だと思っていました。実際仕事でも介護技術、安楽な姿勢をとっていただくなど「生活上の快」の部分は取り組んできていましたが、「心の快」の部分はあまり考えていませんでした。帰国してからも介護の仕事を続けていますが、今では、介護することに加えて、いかに高齢者の笑顔を引き出そうかと考えて仕事に携わっています。

私の派遣先は、ピラポ移住地でした。移住地でも高齢化が進み、福祉が必要で在宅介護、いずれはディサービスもということでしたが、実際赴任してみるとディサービスまでは程遠い状態でした。この地域の活動は前任者がいて、その方が何も無いところから地道な活動により種をまいてくれたので芽をださなければという思いで活動に取り組んでいきました。まずは自分のことを知ってもらうということで、誕生日カードを配り、なるべく高齢者の方と会って話をすることから始めました。入浴介助、話し相手と少しずつでしたが、活動を増やしていきました。半年が経ったころ、婦人による福祉グループ「ひまわり会」が設立されました。介護に携わったことの無いかたの多いグループです。まずはできることからということで高齢者の方に集まってもらい茶話会を開くことから始めました。ピラポは6つの地区があるので、各地での茶話会年2回、全体での茶話会年2回することを行事としました。これは私にとってとても大変なことでした。茶話会ではお茶を飲みおしゃべりをするだけでなく、レクリエーションや体操を取り入れることになったからです。この部分が弱かった自分にとってレ

クは頭を悩ませるものでした。しかし会を重ねていくうちに高齢者と笑って過ごす時間が活動をおもしろくさせてくれました。みなさんの笑顔を思い浮かべプログラムを考えていると自分も自然に笑顔になっていました。

任期が終える日が近づき、ある地区での茶話会でこれまであまり外出されなかった方が参加され、こんなことを言われました。「こんなに笑ったのは久しぶり、生きてよかった。こんなに楽しいことがあるならまだ長生きしなければね」と。またあるご婦人の方からも、「高齢者福祉って移住地には必要ないのにどうしてボランティアが派遣されるのだろうと思っていたけれど、高齢者の楽しむ姿、笑顔を見ていううちに必要なものだと思うようになったよ」と。この二つの言葉は私にとって最高の贈り物でした。そして、「心の快」を引き出すレクリエーションは高齢者福祉にとって必要なものだと自分の中で強く思いました。

私が2年間の活動を無事終えたのも、JICAパラグアイの職員のみなさん、ピラポ移住地のみなさん、ボランティアの仲間、日本の家族や仲間、そして現職のまま送り出してくれた会社、みんなの協力があってからでした。本当に感謝しています。

最後にピラポ移住地のひまわり会のみなさん、活動を続けていくにあたり、いろいろな課題や苦労があると思いますが、ぜひひまわり会を継続させてください。苦労を乗り越えて得るものは自分にとっても大きな力になります。がんばってください。パラグアイでみなさんと一緒に過ごした時間は私にとってとても大切な思い出です。遠く離れた国での出会い、この縁をこれからも大切にしていきます。本当にありがとうございました。

